

主 題：キリストの福音を生きる教会③

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章4、8、5節

テーマ：“神様に喜ばれる教会”とは一体どのような姿をしているのか？

●殉教したジェローム・ラッセルとアレクサンダー・ケネディ：

今からさかのぼること約480年前の1593年、スコットランドにいた二人の信仰者が異端の容疑で逮捕されました。ジェローム・ラッセルと当時若干18歳だったアレクサンダー・ケネディは牢屋に入れられ、その後、大司教の前で尋問を受けることになるのです。非常に思慮深い人物だった年長者のラッセルは大司教や自分たちを告発する者の前で、はっきりと弁明しました。異端であると訴える者たちに対して、自分たちの信仰が神様のことばに基づくものであると、聖書から主張したのです。しかし彼らのことばが聞き入れられることはありませんでした。異端とみなされた二人には死刑宣告がなされ、その翌日には刑が執行されることになりました。翌朝ラッセルとケネディは牢屋から処刑場に向かっていました。その途中、まだ若かったケネディは恐れを覚えます。その場で自分たちの信仰を否定すれば、まだ助かることもできたのです。しかしそんな恐怖の表情を浮かべる友を励ますため、ラッセルはこんなことばを優しくかけていました。「兄弟よ、恐れるな。私たちのうちにおられる方は、この世にいる者より偉大なお方です。これから受ける痛みはあつという間で、軽いものです。しかし、私たちの喜びと慰めには終わりがありません。だからこそ、主人であり救い主である方が私たちの前を歩まれたのと同じ真っ直ぐな道を通して、この方の喜びの中に入るよう努め励もうではありませんか。死は私たちが傷つけることはできません。死はもう既に主によって滅ぼされたのです。この方のために私たちは今から苦しみを味わうのです。」こうして二人は最後まで信仰を守り通しました。火あぶりの刑を前にしても、妥協することはありませんでした。キリストのため、彼らは文字通り自分たちのいのちを喜んでささげたのです。

一体どうして彼らはそのような厳しい苦しみを進んで受け入れることができたのでしょうか？なぜ彼らは目の前に迫る死を避けようとはしなかったのでしょうか？それは、彼らが「揺るがない希望」というものを持っていたからでした。今受ける痛みや痛みというものよりも、先に待っている終わらない喜びや慰めに心を留めていたのです。彼らは偉大な主にある望みに目を向けていたからこそ、大きな試練や困難の中であってなお、堅く立ち続けることができました。どの信仰者の歩みにとっても「希望」というものは、欠かすことのできない大切なものになります。そして、それは私たちが今学んでいるコロサイの教会においても同じでした。きょうは特にその「希望」について一緒に考えてみたいと思います。でもその前に、まずいつものように実際にみことばを見てみましょう。これまでの振り返りも兼ねて、いま一度コロサイ1：1-8をお読みしますのでそれぞれよく見てください。

コロサイ1：1-8

「1 神のみこころによる、キリスト・イエスの使徒パウロ、および兄弟テモテから、2 コロサイにいる聖徒たちで、キリストにある忠実な兄弟たちへ。どうか、私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたの上にありますように。3 私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。4 それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。5 それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。あなたがたは、すでにこの望みのことを、福音の真理のことばの中で聞きしました。6 この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなた

がたに届いたのです。:7 これはあなたがたが私たちと同じしるべである愛するエパfrasから学んだとおり
のものです。彼は私たちに代わって仕えている忠実な、キリストの仕え人であって、:8 私たちに、御霊によ
るあなたがたの愛を知らせてくれました。」

さて皆さん、改めてここ二週間にわたって学んできたことを思い返してみてください。私たちは今タ
イトルにもあるように“神様が喜ばれる教会”の特徴についてみことばから考えていました。コロサイ
の兄弟姉妹たちに手紙を書き送ったパウロは彼らに直接会ったことはありませんでした。しかし彼らの
様子をエパfrasから耳にして、彼らのうちに神様に喜ばれる本当に救われている者に見られるある特
徴を見出していたからこそ、神様に感謝をささげていました。一体どんな特徴をパウロはコロサイの教
会のうちに見出していたのでしょうか？大きく三つあるうちの最初の二つをすでに皆さんと一緒に見まし
た。

○神様に喜ばれる教会に見られる三つの特徴 4－8節

1. キリスト・イエスに対する信仰 4a節

一つ目に見た特徴は、「キリスト・イエスに対する信仰」でした。4節の初めにこう書いていまし
た。「それはキリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と」と。コロサイの兄弟姉妹のうちには、「キリ
ストに対する信仰」がはっきりと現れていました。エパfrasを通して初めて福音が伝えられた時、彼
らはその真理を自分のこととして心から受け入れ、信じました。彼らはイエス・キリストを自分の救い
主、自分の主として受け入れた者たちだったのです。またこの方を心から愛していたからこそ、彼らは
すべてを捨てて従っていこうと日々を忠実に歩んでいました。そんな生きた信仰が彼らのうちにあまり
にも明白に存在していたからこそ、パウロは彼らの姿をもって神様に感謝をささげていたのです。「キ
リスト・イエスに対する信仰」それが一つ目の特徴でした。

2. すべての聖徒に対する愛 4b、8節

またそれだけではなく、コロサイの教会にはそのような信仰に加えて二つ目の特徴をも見て取るこ
とができました。その特徴とは、「すべての聖徒に対する愛」でした。これも同じ4節の後半に書かれて
いました。「すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。」コロサイの兄弟姉
妹は自分たちの主を愛していただけではなく、自分たちと同じように主によって救われたほかの兄弟姉
妹のことを心から愛していました。その「愛」は、ただの感情で終わるものではありませんでした。
彼らは喜んで犠牲を払って、互いに仕え合おうとしていたのです。また彼らの愛には偏りというものも
ありませんでした。彼らはユダヤ人や異邦人といった人種の違いだけではなく、民族や身分といったさ
まざまな壁を越えて、すべての人に分け隔てなくキリストの愛を実践しようとしていたのです。コロサイ
の信仰者のうちには、そのような御霊による愛が、はっきりと現れていました。だからこそ、そんな
彼らの様子を耳にしたパウロは、彼らのうちに働いておられる神様に向かって感謝していたのです。
「すべての聖徒に対する愛」それが二つ目の特徴でした。

では、ここで少し立ち止まって考えてみましょう。私たちはこのように神様に喜ばれる教会の特徴、
もっと言えば、真の信仰者のうちに見られる信仰と愛について、コロサイの人々から学んできました。
こうして見ていく中で、単純にこんな思いや疑問点が生まれてこなかったでしょうか？彼らの歩みは本
当にすばらしい、でも一体どうして彼らはそんな歩みをし続けることができたのだろうか？なぜなら
ちょっと考えてみてください。イエス・キリストを信じたコロサイの兄弟姉妹たちはその信仰を固く保
って、いつも忠実に歩もうとしていました。でも当然、そのような歩みにはさまざまな困難が伴うもの
であったということは言うまでもありません。私たち自身もよく知っているとおりに、いつの時代にあっ
てもキリストにまっすぐ従っていこうとすれば、さまざまな難しさや痛みというものが伴うのです。罪
にあふれたこの世にあって憎まれたり迫害されたりすることもあったでしょう。ましてや以前にも触れ
たように、教会のうちにはにせ教師たちが入り込んでいました。間違った教えが広まり始めていたの

す。そのような中で、揺るがされることなく、正しい教えに立ち続けようとするれば、間違いなくチャレンジや戦いがあったことでしょう。また彼らは互いの間でも犠牲を払って愛し合おうとしていました。分け隔てなくすべての人に対して愛を示そうとしていたのです。当然これにも難しさが伴うということは、私たち自身もよく知っていますね。本来なら、互いの成長のためになることだけをするべきなのに、私たちも自分のことだけを考えて人を傷つけてしまうことがあります。残念ながら救われた者もみな罪の性質を持っている以上は、兄弟姉妹の間にあっても、争いや分裂というものが生じてしまったり、互いに憤りや不満を抱くこともあるのです。コロサイの教会も例外ではありませんでした。彼らもいろいろな問題を抱えていたのです。しかし難しさを覚えるそのような状況にあっても、彼らはその信仰と愛によって特徴づけられる群れでした。そのような信仰者として彼らは歩んでいたのです。そうだとすれば、一体どうして彼らはそんな歩みをし続けることができたのだらうと思いませんか？もちろんそこには根拠がありました。そしてそれこそが、今回私たちが考えていく三つ目の特徴、「天にたくわえられてある希望」になるのです。

3. 天にたくわえられてある希望 5節

私たちが今回考える“神様に喜ばれる教会”の三つ目の特徴、それは「天にたくわえられてある希望」です。ラッセルやケネディも同じであったように、コロサイの教会は「希望」を持っていました。今受ける苦しみや痛みよりも、先に待っている終わらない喜びや慰めに心を留めていたのです。揺るがない希望、望みを持っていたからこそ、彼らは日々忠実に歩み続けることができました。では皆さん、彼らが持っていた「希望」とは具体的にどのようなものだったのでしょうか？実際にそのことをみことばから見てみましょう。そしてぜひ自分自身のこととして改めて考えてみてください。果たして私自身は、その希望持っているのだらうかと。持っていると言うのであれば、どんな希望を私たちは神様から与えられているのだらうかと。このみことばが皆さんひとりひとりの励ましになることを心から祈っています。

ではもう一度、4-5節をよく見てください。神様に喜ばれる教会の三つ目の姿、希望に関することがこのように記されていました。「:4 それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。:5 それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。あなたがたは、すでにこの望みのことを、福音の真理のことばの中で聞きました。」はっきりと述べられていましたね。「「信仰」と「愛」、「それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。」」と。パウロはここで「私はあなたがたのキリストに対する信仰とすべての聖徒に対する愛についてエパフラスから聞きました。」と言っていました。「そんな彼らが持っている信仰と愛は、天にたくわえられている希望に根ざしたものです。」と。言い換えれば、「将来に対する希望、望み…それがコロサイの人々の持っていた信仰と愛の基盤だった」ということです。彼らは、自分たちを待っているものが何かを知っていたからこそ、日々の歩みにあつてキリストに忠実であろうとし続けていました。自分たちのことを待っているものに望みを抱いていたからこそ、彼らは互いの間で犠牲的な愛をますます実践し続けようとしていたのです。確かにさまざまな困難や苦しみが彼らの周りには存在していました。でも、将来に対する希望、それが彼らの信仰や愛というものを支えていたのです。非常に大きな力が、この希望にはありました。絶対に欠かすことのできないものだったのです。

私たちにとってもこの希望というものは欠かすことができません。だからこそ、ここで絶対に勘違いしてほしくないのをよく考えてみてください。「希望」って一体何でしょう？パウロはこの箇所ですべて「望み」ということばを用いていたのですが、そもそもこのことばにはどんな意味があるのでしょうか？例えば日本語の辞書を引いてみると、「こうなれば良い、こうなってほしいと願うこと」とか「将来に対する期待」といった意味が載っています。また私たち自身も普段の生活の中で「来週晴れたらいいのに」

とか「大切な用事があるからあすの電車が止まらないことを望んでいます」というように口にすることもあります。そのように、私たちはこの「希望」「望み」ということばを、「将来に対する単なる願望」「実現するかわからないようなそんな願い」を表わすのに用います。では、コロサイの信仰者たちはそのような淡い期待を持って生きていたのでしょうか？彼らは自分たちのために、おそらく？多分？天にたくわえられてあるだろう？…そんな不確かな希望に基づいて、日々を熱心に歩もうとしていたのでしょうか？いいえ、そうではありませんでした。聖書の中で使われている「希望」ということばは、そんな将来に対する単なる願望とか願いを表すものではなかったのです。では一体どんな意味があるのでしょうか？

この希望ということばが聖書で用いられるとき、これには「将来に対する揺るがない確信」という意味が含まれていました。これが、私たちが覚えなければいけない大切なことです。何か漠然とした淡い期待を指しているのではありません。このことばは、将来に起こることへの強い確証です。またもっと言えば、「この先神様がすばらしいことを成されると確信を置くこと」を表していたのです。「この先起こることに対する強い確証」「強く確信を置くこと」を表していました。RCスプロールという先生も、この希望ということばに関して次のように説明していました。「希望はクリスチャン生活に安定を与えるので、たましいの錨とも呼ばれています。(ヘブル6：19)希望とはこうなればいいなという単なる『願い』ではなく、将来に関する神様の約束の確実性にすぎることなのです。」ですから、信仰者が持っているこの「希望」、これは間違いなくこの世が普通に考えているようなものとは違いました。実現するかどうかかわからないような淡い期待や願いではなくて、「必ずそうなる、という揺るがない将来への確信」…それが聖書の教える「希望」だったのです。このようになる、と。そんな望みをコロサイの人々は持って歩んでいました。

でも、彼らが持っていたこの希望、望みについてパウロが描いていたことは、それだけではありません。もう一度5節をよく見てみると、彼はここで単に「望み」とは言っていない。「それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。」とそう書いていました。「天にたくわえられてある望み」なのだ。コロサイの兄弟姉妹たちが持っていた希望、それは、地上にではなくて、天にたくわえられていたものだったというわけです。言い換えれば、この希望というのは、神様によって天で用意されているものだった、ということです。この希望は天にたくわえられていたのです。天にたくわえられているからこそ、だれかによって決して奪い取られるようなことはありませんでした。失われてしまうこともありませんでした。傷が付いて汚れがついてダメになることもありませんでした。この希望というのは、今は目にすることがなかったとしても、天にあって、ほかのだれでもない神様によって堅く守られていたのです。ペテロも同じことをこのように表現していました。I ペテロ1：3-4を見てみると「:3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。:4 また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。」天にたくわえられていた希望、それはだれによっても奪い去られるものではない、堅く守られたものでした。こうして神様のあわれみによって救われた者はみな、揺るがない希望を持っていました。コロサイの教会は決して変わることも偽ることもない、そんな永遠の神様によって天にたくわえられた望みを持って忠実に生きていたのです。

さて皆さん、ここまで見てきてこんな疑問が浮かぶかもしれません。では、そもそも彼らの抱いていた「希望」とは、具体的に何ですか？彼らは実際にどんなものを待ち望んでいたのですか？将来の何に確信を置くことができたのでしょうか？と。簡潔に言えばそれは、彼らがイエス・キリストにお会いし、この方とともに永遠を過ごすことができる、ということでした。これこそが、すべての信仰者が例

外なく持っている揺るがない確信でもあるのです。コロサイの兄弟姉妹にとってもそうであったように、それは私たちにとっても持っている、揺るがない確信になります。この地上において私たち自身は今、短くてはかない一生を過ごしています。かつてヤコブが言っていたように、私たちのいのちというのは、「しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎ」ないのです。（ヤコブ4：14）私たちにとってこの地上での生活は、一時的なものでしかありません。必ずいつの日にか、死がそれぞれのもとにやって来るのです。それがいつやって来るかは私たちにはわかりません。でも必ずやって来るのです。しかし同時に、私たちは死んで終わりではないということをよく知っています。いつの日か必ず主にお会いする日がやって来るのだと、私たちはみことばからそう知っているのです。

立ち止まって考えてみてください。一体その日はどんなにすばらしい日でしょうか？！罪の中に死んでいた私たちを、ただご自身の愛とあわれみによって救い出してくださったその主と、いつまでもともにいることのできるその時が私たちを待っているのです。本来であれば滅ぼされるべきそんな私たちに対して、みずから救いの御手を差し伸べてくださった、そんな恵み深い方と永遠をともにすることができると。この方の前にへりくだって、その偉大さに賛美をささげて、この方の力や知恵、あふれんばかりのその栄光を、心からいつまでもほめたたえることができるそんな時が必ずやって来るのです。やって来るかもしれない、ではありません。やって来るのです！そんな希望を私たちは持っているのです。そうだとすれば、このような揺るがない将来への確信というのは、私たちのうちに大きな励ましや慰めをもたらすものではないでしょうか？いつの日かイエス・キリストと永遠をともに過ごすことができるのだというその希望、それは、あなたのうちにも最高の喜びをもたらすものではないでしょうか？コロサイの兄弟姉妹たちはそんな希望を持っていました。

またそれがコロサイの兄弟姉妹たちだけではなくて、必ずやって来るその日、その揺るがぬ希望を今、私も持って生きていくと言うなら、一つのことを覚えておいてください。もし私たちがキリストのうちに永遠の望みを抱いていると言うなら、今のこの世は私たちにとって人生の最高の時ではない、ということです。私たちがキリストのうちにあって、先を待ち望んでいる者だとすれば、私たちが今生かされているこの世での人生というのは、今もこの先も最高の時には決してならないということです。私たちの最高の喜びは今ではなくて、その先にある、ということです。でももしあなたが、「いやいや、今が最高の時です。」と言うなら、それは大きな問題です。なぜなら、みことばはそのようには教えていないし、もしあなたがキリストのうちにいないのなら、その人を待っているのは一切の希望を見出すことができない永遠のさばきでしかないからです。でももし、今は人生の最高の時ではない、私にとっての最高の時は後でやって来るのだと、そのように正しく覚えているなら、私たちは正しい態度を持って今を歩いていくことができます。生かされている今をふさわしい態度で歩いていくことができます。

どういうことか？ちょっと考えてみてください。私たちが周りを見渡してみれば、多くの人たちは今のこの人生をどうにかして最高のものにしようと熱心に取り組んでいます。いろいろな困難に直面する中であって、どうにかして喜びや満足を見出そうとして葛藤しているのです。そのすべてが別に間違っているわけではありません。でもそのように、この世のことに目を留めてこの世のことだけに心が奪われれば、その態度が結果として、時に、みことばが教えてくれている大切な真理から私たちの目を逸らすことに繋がるのです。どんな真理か？私たちにはこの世ではなくて、先に揺るがぬ希望があるという真理です。それを私たちから忘れさせてしまうのです。そしてもし、私たちがそのようにして全体像を忘れてしまえばどうなるか？私たちは自分の目の前で起こっていること、その苦しみや痛みや心に心が奪われて、失望してしまうことがあります。さまざまな目の前の思いに心が捕らわれて、不満や憤りで心が満ちてしまうことがあるのです。私たちが今に心が奪われて、この先にある決して揺るがない希望を忘れてしまえば、さまざまな問題が生じるようになるのです。だからこそ、覚え続けることです。私たちの本当の住まいはこの世ではありません。この世に私たちはしがみついているわけではありません。

いつの日か主にお会いするという、その揺るがない約束を私たちは持って今を生きています。その日はいつかやって来るのです。その日に今も少しずつ近づいています。そしてその時こそ、私たちにとって今まで経験したこともないような最高の時となるのです。確かにこの世にあって私たちが歩んでいけば、いろいろな試練や苦しみを経験します。それは人それぞれ違います。でもそれらと、必ずやって来るその日の希望、喜びを比べるなら、私たちは希望を持って歩み続けることができるのです。パウロもローマ8：18でこう言っていました。「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」と。Ⅱコリント4：17-18を見てもこう書いていました。「:17 今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。:18 私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」皆さん、私たちはどこに目を留めているでしょう？私たちはいつも何を考えているでしょう？今の世は、私たちにとって人生の最高の時ではありません。その時は、後で必ずやって来ます。だからこそ、残された短い日々を、一日一日主の栄光を現すために忠実に歩み続けていこうとするのです。終わりがわかっているからこそ、そして、その時に想像を絶するほどの喜びが待っていると知っているからこそ、私たちは残された日々を主に喜ばれる者としてみことばを学んで、いろんな難しさはあったとしても、でも互いに愛し合おう、神様に喜んで従っていこうと、そのようにして歩み続けていこうとするのです。そして、私たちがこの歩みを続けていく秘訣は、今ではなくて、先に目を向け続けることです。もっと言えば、私たちがどこに行くかだけではなく、だれと永遠をともに過ごすことになるかということをお返し続けることです。

ちょっと考えてみてください。例えばあなたがだれかから「天に行くことを楽しみにしていますか？」と聞かれれば、何と答えます？「もちろんそうです！」と答えられるでしょう。でもどうでしょう？イエス・キリストと天で永遠をともに過ごすことができるということ、この方とともに過ごすことができるというその日を、私たちは今どれだけ心待ちにしているのでしょうか？ジョン・パイパーという先生がこんな質問を投げかけていました。これを自分自身のこととして少し考えてみてください。「私たちの世代、また全ての世代にとって重要な問いは次のようなものです。もし、あなたが病気や人との争い、自然災害のない、また地上で出会った全ての友人、好きだった全ての食べ物、楽しんだ全ての娯楽、目にした全ての自然の美しさ、味わった全ての快樂が揃っている、そんな天国を手にしたとしても、もしそこにキリストがいなくて、あなたはその天国に満足することができるのでしょうか？」皆さんならどう答えるでしょう？「キリストがともにいないのであれば、私はたとえどんなものでも手にしたとしても満足することなど絶対にできない」と心からそう言うのでしょうか？「イエス・キリストだけが私にとって本当の宝であるからこそ、この方を私が手にできないのならそれ以外のものは要らない」とそう言うのでしょうか？それとも「キリストがいなくても自分は満足だ、大丈夫だ」とそう考えてはいないのでしょうか？コロサイの兄弟姉妹たちは揺るがぬ希望を持って日々を歩んでいました。彼らは、偉大な主にある望みに目を向けていました。キリストと永遠をともにすることを楽しみにしていたからこそ、キリストと永遠をともにするということが必ずやって来るとそう確信していたからこそ、さまざまな困難や試練の中にあっても、なお堅く立ち続けることができたのです。

これまでも見てきたように彼らのうちには、にせ教師たちが入り込んでいました。間違った教えが広まり始めていました。間違いなくその中で信仰を保ち続けることにはチャレンジや戦いがあつたでしょう。分け隔てのない愛を実践するということにも当然難しさが伴ったはずですが、しかし彼らはそんな今受ける苦痛や苦しみや悲しみや痛みというものよりも、自分たちに将来必ず待っている喜びや慰めというものに心を留めようとしていたのです。一時的なものではなくて、永遠に価値あるものに確信を置いていました。だからこそ、彼らはそんな苦しみを覚える世の中にあつてなお、その信仰と愛によって特徴づけられる信仰者として歩み続けることができたのです。キリストに必ずお会いするというその

希望が、彼らの歩みを支えていました。ヨハネもこんなことばを残しています。Ⅰヨハネ3：2-3に「2 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。3 キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」と。

では、私たち自身はどうでしょう？果たして私たちはこのような希望を持って今を生きているのでしょうか？天にたくわえられた希望、揺るがないその希望に目を向けているからこそ、終わりがわかっているからこそ、必ず成し遂げられることがわかっているからこそ、今を忠実に歩み続けようとしているのでしょうか？この地上での生活が本当に一瞬のものであると信じているからこそ、どんな罪からも離れてますますキリストに似た者になっていきたい、とそう熱心に願って歩み続けているのでしょうか？それとも、何か別のものに望みを置いて生きていこうとしていないのでしょうか？キリストと永遠をともにすることよりも、何か別のものに喜びを見出そうとしていないのでしょうか？私たちは知っています。私たちが生ける望みを与えられるまで、私たちが救われるまで私たちはいろいろなものに満足を、希望を見出そうとしました。でも私たちはキリストを知った時に、それがはかない一瞬のものであって全く頼りにならないのだとわかったのです。そのことを私たちはよく知っているはずですが、でも、もしそうであるなら、私たちはいつまでそのようなはかないものを求め続けようとするのでしょうか？それとも、今持っているキリストにあるその最高の喜びに目を留めて歩み続けようするのでしょうか？私たちはほかのだれでもない主にお会いするその日がやって来ることを知っています。そのやって来る日を知っているのなら、その日を心待ちにする思いが日々増し加わっているのでしょうか？その日を迎える準備はできているのでしょうか？

もしまだ皆さんの中にこのイエス・キリストにある生ける望みというものを知らない方がおられるなら、この方を本当に個人的な救い主、主として知らない方がおられるならば、よく次のみことばに耳を傾けてください。きょうも何度か見てきたように、いつの日か、私たちは例外なくこの世での終わりを迎える時がやって来ます。どんな人であろうとも必ずみんないつか死に直面するのです。でもそれだけではありません。みことばはこんなことばを記していました。ヘブル9：27に「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、」またローマ2：5-6にはこう書いていました。「5 ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現れる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。6 神は、ひとりひとりに、その人の行いに従って報いをお与えになります。」と。聖書はつきりと教えてくれています。人には死だけではなくて、必ずさばきがやって来るのだと。もしかしたら今、あなたはあなたを造られた創造主のことを考えようともせずに、自分自身を満足させるために生きているかもしれません。この地上での生涯を自分の好きなように生きようとも何の結果も伴わない、と考えているかもしれません。神様を無視して逆らって歩もうが自分には何の影響もない、関係もないと思っているかもしれません。でも死が必ずひとりひとりにやって来るように、みことばは、一切の罪や汚れを赦すことのない、よしとしない、そんな聖く正しい神様がさばく日がやって来るのだ、と教えていたのです。だれひとりとしてこのさばきから逃れることはできません。この罪に対して燃え上がっているこの方の正しい御怒りの炎から逃れることなどできません。永遠のさばきが待っているのです。でも、まだ希望があります。本来であれば希望なんて一切なかった罪に死んでいた私たちに対して、主ご自身が救いを備えてくださいました。

今から約二千年前、神の御子である救い主イエス・キリストがこの地上に人として来られました。この世界に誕生されたイエス様は完全な人であって、また完全な神様であるお方でした。だからこそ、その生涯において一度も罪を犯すことはなかったのです。しかしそんな罪のないお方が、私たちの身代わりとなって十字架にかかってくださり苦しみ死なれました。この方は何の間違いも犯さなかったからこ

そ、死ぬ必要もなければ、ましてや十字架の苦しみを受ける必要などありませんでした。でも、この方がみずから進んで十字架にかかり、私たちの代わりとなってその血を流してくださったのです。だからこそ、この方を信じ受け入れる者には罪の赦しが与えられると、そう約束してくださっているのです。でも、一体どうして神様に逆らっていたこんな私たち罪人のために、救い主はみずからを犠牲にしてくださいましたのでしょうか？それはただ愛のゆえでした。私たちの理解をはるかに超えた神様のあわれみが、私たちの罪の問題を解決してくださったのです。本来であれば神様の怒りは当然私やあなたのような罪人の上に注がれるべきものでした。しかし私たちが受けるべきその罪の罰をキリストが背負ってくださり、罪に対して燃え上がる神様の怒りに、代わりに耐え忍んでくださったのです。これが、神様が私たちに示してくださった偉大な愛でした。Iヨハネ4：10にもこう書いていました。「**私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。**」ですからもし、まだこの救いを本当に自分のものとしていない方がおられるなら、きょうこの神様の前に罪を悔い改めて、イエス・キリストを自分の救い主、主として信じ受け入れてください。この方にある生ける望みを自分のこととして知ってください。そしてこの方に信頼し、すべてをささげて生きていく人生を始めてください。この方にのみ救いがあり、この方にのみ本当の喜びがあります。

またもうすでに主を愛して今を歩んでおられる兄弟姉妹の皆さん、コロサイの教会は天にたくわえられた望みを持って歩むそんな群れでした。彼らは今受ける苦しみや痛みというものよりも、先に待っている終わらない喜びや慰めに心を留めていたのです。彼らは主イエス・キリストにお会いするというその日を心から楽しみにしながら、信仰と愛において人々の前で証しを立て続けた信仰者たちでした。だからこそそんな彼らの歩みを耳にしたパウロは、間違いなく救われている、この人たちのうちに神様が働かれていると、そう神様に感謝をささげていたのです。では、私たち自身はどうでしょうか？キリスト・イエスを心から愛する信仰のゆえに、この方のために日々自分の十字架を負って、すべてを捨てて忠実に歩もうとし続けているのでしょうか？同じキリスト・イエスによって救われた兄弟姉妹たちのことを心から愛するその愛のゆえに、みずから進んで犠牲を払って、分け隔てなく愛を示そうとし続けているのでしょうか？そして何より自分を救ってくださったイエス・キリストにお会いするその日が必ずやって来ると、そのことを楽しみにしながら、揺るがない希望も持って歩み続けているのでしょうか？もちろんそこには困難や犠牲も伴います。でも皆さん、かつての信仰者たちはそのように歩んでいました。神様に喜ばれる教会として、真の信仰者として忠実に主に従って歩もうとしたのです。一番初めに見たラッセルのことばの中で、このように言われていました。もう一度見てみると、「私たちのうちにおられる方は、この世にいる者より偉大なお方です。これから受ける痛みはあつという間で、軽いものです。しかし、私たちの喜びと慰めには終わりがありません。だからこそ、主人であり救い主である方が私たちの前を歩まれたのと同じ真っ直ぐな道を通して、この方の喜びの中に入るよう努め励もうではありませんか。」と。皆さん、私たちも同じように主人であり、救い主である方に目を留め続けることが必要です。私たちも、今みことばを通して、いつの日か私たちの愛する主に必ずお会いするという揺るがない希望を持って生きています。この希望は、決して失望に終わることはありません。確かに私たちは失敗もします。残念ながらいろいろな点で神様を悲しませてしまうこともあります。でも、それでもなお神様を愛しているからこそ、すべての聖徒を愛して、そして、天にたくわえられている揺るがない希望、それに特徴づけられるそのような群れをますますともに目指していきましょう。